

「平和・安全・共生」のためのグランドセオリーの構築と共有

異質性に関かれたまま共通基盤を構築する試み

文責：萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）

本学COEでは、「平和・安全・共生」のグランドセオリーを構築するという作業を進めるための一つの方法として、「グランドセオリー・セミナー」と題した研究会合を繰り返し開催してきた。会合の目的は、それぞれ専門や問題関心が異なるCOE関係者が、グループやプロジェクトの垣根を越えて、グランドセオリーの構築へと共働できるような共通基盤を整えていくことである。会合は、主として事業推進担当者とCOE共同研究室メンバーを中心とした発表と討議によって構成されている。

第1回 2005年12月23日・24日

村上陽一郎「『平和・安全・共生』のグランド・セオリー構築の基礎概念」

千葉真「現代にグランド・セオリーは可能か」

小松崎利明（COEリサーチ・アシスタント） アンケート報告

コメント（1） 功刀達朗「国連システムのリーダーシップと地球市民社会—グローバル公共政策の新領域—」

コメント（2） 藤田英典「グランドセオリーの構築に向けて—システム論的アプローチと共生の視座—」

谷村光浩（COEリサーチ・フェロー）「『パラレル居住』対応の『量子都市ガバナンス』を新機軸に」

萩原優騎（COEリサーチ・アシスタント）「参照枠としてのグランドセオリー・序説」

齊藤淳（同前）「『安全』と『平和』、『共生』との関係についての試論 オーストリアの『包括的』安全保障政策との関連で」

司会 森分大輔（COEリサーチ・フェロー）

第1回セミナーでは、互いの議論を共有する出発点として、「平和」、「安全」、「共生」の諸概念の意味とその関係性、グランドセオリーとは何かといったことを中心に、発表と討議が行われた。議論の中心となったのは、「グランドセオリー」という概念が通常用いられる場合に想定されていることと、本学COEが位置づけるものとはどのように異なるのかということである。また、事業推進担当者や研究協力者に対して行った、グランドセオリーに関するアンケートの集計結果の発表とそれに対する検討もなされた。

第2回 2006年6月26日

北原和夫「Peace, Security and Coexistence」

村上陽一郎「共約不可能性と寛容」

功刀達朗「Constructing a Grand Theory on Peace, Security, and Conviviality to the Current Identity Crisis of the UN」

千葉真「一つの方法論的試論—平和・安全・共生の三概念の関連について」

毛利勝彦「平和と開発のガバナンス：共進化、共生、地球市民社会」

西尾隆「分権・共生社会の森林と林業—共生の類型論に向けて—」

Jacqueline Wasilewski「How People Harness Their Collective Wisdom and Power to Construct the Future in Co-Laboratories of Democracy by Alexander N. Christakis with Kenneth C. Bausch」

山本和「Globalization and Higher Education—The United Board Task Force—」

司会 萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）

第2回セミナーでは、第1回セミナーでの理論的考察に続いて、事例研究を主とする研究者を中心とした発表が行われた。本学COEでは、グランドセオリーが「平和・安全・共生」という主題を論じるためのマクロな理論として機能することと同時に、その理論が活用される個々の具体的な場面に関する記述と、そのような場面での実践が常に重視されてきた。すなわち、グランドセオリーがミクロな現実とどのような接点を持つことになるのかという問いであり、その点を中心とした討議が事例に即して行われた。

第3回 2007年3月15日

川口和子（上智大学外国語学部教授）

「人間・国家・国際関係の総合的理解を目指して：公理系としての複雑システム（行動システム）の視点」

司会 萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）

第3回セミナーの目的は、過去2回にわたって討議されてきた、理論研究からのアプローチと事例研究からのアプローチとの関係を整理することである。そこで、学外から講師を招き、過去2回のセミナーで提示されたものとは異なる観点から、理論研究と事例研究の関係性を捉え直すことを試みた。講師を務めた川口和子教授の視点は、システム論に立脚した一つの理論により、対人関係から国際関係に至るまで、様々な規模の問題を説明できるというものであった。この点について、活発な討議が展開された。

第4回 2007年4月28日

村上陽一郎「人間の構造と機能—寛容の起源」

萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）「『平和・安全・共生』の統合概念としての『寛容』—その意義と射程を精神分析的に考える—」

司会 森分大輔（COEチーフ・リサーチ・フェロー）

第4回セミナーでは、各グループ及びプロジェクトがグランドセオリーの構築を進める上で、共有すべき概念を設定することを主眼とした。そこで、村上陽一郎教授が提唱する「寛容」という概念についての発表と討議がなされた。開催に当たって、村上教授の著作『文明の死/文化の再生』をテキストとして指定し、参加者は事前に

同書を読むこととした。討議では、ここで提唱されている「寛容」という概念が、これまで通常用いられてきた意味とどのように異なるのかということに力点が置かれた。

第5回 2007年6月16日

千葉眞「平和・安全・共生のグランドセオリーにむけて」
森分大輔（COEチーフ・リサーチ・フェロー）「平和・安全・共生の思想分析——ホプズとアレント——」
司会 萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）

第5回セミナーでは、第4回セミナーでの討議内容を基礎として、どのようにグランドセオリーを展開できるかということについて検討がなされた。千葉眞教授はこの点について、「平和」をめぐる理論を中心としたアプローチに立脚しつつ、それをグランドセオリーとして位置づけることの意義と可能性、「寛容」との関連等について言及した。また、「平和」、「安全」、「共生」という三つの概念と「寛容」がどのように関係するのかということについて、特に時間を割いて討議が行われた。

第6回 2007年10月13日

森本あんり「『道徳的寛容』と呼ばれる概念の歴史的再検証」
村上陽一郎「社会の不安定性」
司会 萩原優騎（COEリサーチ・フェロー）

第6回セミナーでは、これまでのセミナーで出された論点を整理するために、「寛容」という概念の再検討が行われた。森本あんり教授は、これまで一般的に用いられてきた意味での「寛容」という概念にはどのような問題点があるのか、それをどのように捉え直す必要があるかということについて、発表を行った。また、そのような再検討を経て位置づけられた概念が、村上教授が提唱する意味での「寛容」とどのような関係にあるのかということについても、具体的な討議がなされた。

このように振り返ってみることで明らかになるように、グランドセオリー・セミナーの実施過程は、まさにグランドセオリーが徐々に具体的な形をとりながら構築されていく過程に重なる。その意味で、グランドセオリーは、セミナーでの学際的、共働的な発表と討議を通じて形成されていったとすることができるだろう。その過程で重要であったと思われるのは、各セミナーで、その回の主題を明確に設定し、企画・運営を行ったことである。すなわち、単にセミナーを繰り返すのではなく、それぞれのセミナーの中で実現されるべき課題を立て、その目標設定に従って会合の準備や各々の発表がなされた。

このことは、専門や主要な問題関心が異なる研究者が一堂に会して学際的な成果を出すために不可欠であったと考えられる。その意味で、グランドセオリー・セミナーの開催を通じた継続的討議の実践過程は、本学がCOEに採択されたことをきっかけに、それまで本学では萌芽的に行われてきた共同研究を開花させたと言える。本学COEの研究活動は「広域平和研究」と名づけられているが、「広域」であるゆえに、各々の専門領域だけでは全体像を描くことは困難である。そのような問題点を克服する手法として活用されたことに、このセミナーの一つの意義がある。

また、最初は各々の問題関心に従いつつ「平和・安全・共生」やグランドセオリーを定義することから出発し、最終的には「寛容」という概念を共有し相互批判的な討議が可能な段階へと至ったことは、本学COEの研究の進展を具体的に示していると言える。もちろん、それぞれのグループやプロジェクトによって視点やアプローチは異なるが、「寛容」を主軸とすることで、それらが互いに異質なままに相乗効果を持つような研究活動を展開できたということの意義を、ここで強調しておきたい。それは、「学際性とは何か」という、本学COEにとって根本的な問いに関わるものである。

異なる学問領域が、互いに接点を持たないまま単に並列的に位置づけられていたり、逆に一つの点に収斂するに伴って、各々の研究領域が元々持っていた可能性が失われていったりするとすれば、それは望ましい学際性とは言えないだろう。日本に限ったことではないが、「学際性」という名の下に新たな専門領域が形成され、再び閉鎖性に陥りがちな学際研究の問題が、これまでも度々指摘されている。そのような現状を打破し、異質性に開かれたまま共通性を模索できるような、学際的共同研究の実践がここにある。